＜学術論文＞

家畜に関わるメタファー表現についての一考察

―― 日本語の諺，慣用句における「馬」，「牛」を例に ――

韓　琦
東亜大学大学院　総合学術研究科　人間科学専攻
安順学院　外国語学院
2759036420 @ qq.com

《要　旨》

Lakoff & Johnson（1980）によって，メタファーは言語活動だけでなく，思考や行動に至るまで，日常の営みのあらゆるところに浸透していると指摘されて以来，認知的な視点からのメタファー研究が盛んに行われてきた。近年，動物に関するメタファーの研究が注目を集めている。しかし，目下，動物のメタファーに関する研究は，個々の動物で完結している研究が多く，家畜動物というより大きなカテゴリーを設定した上で考察したものは少ない。それゆえに，家畜動物という視点で見た場合におけるメタファー表現の体系性を巡っては依然として不明な点が多い。本稿は家畜動物というより大きなカテゴリーを設定した場合における，個々の家畜動物間の関係性を探ることを目的としたものである。今回は，日本語の諺，慣用句における「馬」,「牛」のメタファー表現を対象とし，両者のメタファー表現がどのような関係性を持つのかについて考察を行った。その結果,「馬」と「牛」のメタファー表現からは特徴的な表現群が抽出され，それらの表現群の間には「馬」と「牛」における対立関係が認められた。さらに,「馬」と「牛」のメタファー表現において,「優れたもの / 劣ったもの」というような，ある動物に特定の特徴が集中する理由の一つとして，今回の考察範囲内で言えば，メタファー表現が成立する際に「馬」と「牛」の対立関係が前提として存在している可能性があることを指摘した。

キーワード : 家畜，馬，牛，メタファー，対立関係

《目　次》

1. はじめに
2. 先行研究
　2.1 動物に関する諺，慣用句に関する先行研究
　2.2 動物のメタファー表現に関する先行研究
　2.3「馬」のメタファー表現に関する先行研究
　2.4「牛」のメタファー表現に関する先行研究
　2.5 先行研究のまとめと課題の導出
3.「馬」,「牛」のメタファー表現の特徴
　3.1「馬」のメタファー表現の特徴
　3.2「牛」のメタファー表現の特徴
4.「馬」と「牛」のメタファー表現の関係性
　4.1「優れたもの / 劣ったもの」
　4.2「脚の速さ / 遅さ」

4.3「地位の高さ / 低さ」
4.4「持久力の有無」
4.5「落ち着きの有無」
5. 考察
6. まとめと今後の課題

1. はじめに

家畜動物は人類における最も親密なパートナーであり，直接観察し感じ取ることができる存在である。人類は家畜動物と長い時間をかけて共存する中で，それらの特徴，すなわち，外見，行為，特徴，習性等を熟知してきた。これにより，人類が家畜動物に対して抱くイメージは，我々の思考・感情の領域に深く入り込み，メタファーを通じて自身と家畜動物とを深く結びつけてきた。その端的な例として，家畜動物の含まれる諺，慣用句が挙げられる。

さて，家畜動物に関する諺，慣用句に関する研究においては，その大部分がそれらの起源，分類，修辞を追求するものに限られている。

それに対して，認知言語学におけるメタファーの研究においては，動物の関わるメタファー表現に関する研究が豊富に存在する。例えば，項・王（2009）は，動物のメタファー表現は人間の言語における普遍的な現象である[(1)]と述べている（項・王 2009, p.239）。また，Wierzbicka（1996）は，動物の「大きさ」,「外見」,「行動」，そして人間との関係などは，人々の概念の中で非常に重要なものであることを指摘している（Wierzbicka 1996, p.172）。さらに，Kövecses（2002）では，人間の行為は動物の行為を用いたメタファーの技法で理解できることに言及している（Kövecses 2002, p.124）。これらの研究は認知言語学の発展に伴い，動物に関する諺，慣用句の研究に新たな観点を提供したと言える。

一方で，家畜動物のメタファーに関する研究は，個々の家畜動物で完結している研究が多い。例えば，犬であれば，犬の研究で完結し，猫であれば，猫の研究で完結しているというように，個々の動物で完結している場合が多い。言い換えれば，家畜動物というより大きなカテゴリーを設定した上で考察したものは少なく，それゆえに，家畜動物というカテゴリーから見たメタファー表現の体系性を巡っては依然として不明な点が多いのが現状である。

そこで，本稿では，家畜動物というより大きなカテゴリーを設定した際に，個々の家畜動物の間にはどのような関係性があるのかという研究課題を設定する。その上で今回は，日本語の諺，慣用句における「馬」,「牛」のメタファー表現を対象とし，家畜動物というカテゴリーの中で，両者のメタファー表現がどのような関係性を持っているのかを明らかにする。

本稿の構成は以下の通りである。まず 2 節において動物のメタファー表現及び「馬」,「牛」のメタファー表現に関する先行研究をまとめる。次に 3 節において「馬」,「牛」のメタファー表現の特徴を分析する。4 節では家畜というグループの中で「馬」,「牛」のメタファー表現の関係性について考察する。5 節ではまとめと今後の課題を述べる。

2. 先行研究

本節では，①動物に関する諺，慣用句に関する先行研究，②動物のメタファー表現に関する先行研究，③「馬」,「牛」のメタファー表現に関する先行研究を概観し，先行研究において「家畜」というより大きなカテゴリーでの考察が行われていないこと，及び，動物間のメタファー表現の関係性についての言及がほとんど見られないことを確認する。

2.1　動物に関する諺，慣用句に関する先行研究

この節では，動物に関する諺，慣用句の先行研究を概観し，検討を行う。

まず，朱（2009）[(2)] は馬，牛，犬，猫という四種類の家畜動物について，日・中・韓の三国の諺における家畜文化，及び，家畜文化における各動物の役割，そして，そのイメージ象徴について比較，考察を行っている。具体的には，朱（2009）は日・中・韓の諺における四種類の動物のイメージについて肯定的イメージと否定的イメージの二つの側面に焦点を当て，用例を取り上げた上で比較を行い，それぞれの国における家畜文化の共通点と相違点を探っている。その中で，本稿と関わる「馬」については，「速い」「人材」「利口・記憶がいい」「人情味・忠実」「地位・権力」「財産」「倫理」という肯定的イメージと，「危険・用心」「下卑」「無知・無能」「女性」「欲張り」「頑固・癖」「裏切り者」という否定的イメージを持つと述べている。一方，「牛」については，「強者・力強い」「勤勉・根気」「愛護」「財産」という肯定的イメージと，「遅い」「不利」「無知・愚か」「下卑」「頑固」「暴れ」という否定的イメージを持つと述べている。

朱（2009）は四種類の家畜動物について，日・中・韓の三国間でそれぞれ個別に考察を行っているが，各家畜動物間の関係性が議論されていない点で課題が残っている。また，この点については朱（2009）においても，今後の研究課題であることが言及されている。

次に，馬場（2010）では，「牛」に関する日本の諺を取り上げ，諺に反映された牛に対する人々の捉え方について考察している。具体的には，牛の体の部位，及び動作・性質について考察を行い，「牛」に関する日本の諺には「無感覚」「争い・強さ」「見栄え・よさ」「自由を失う・苦しみ」などの特徴を指摘している。また，馬場（2010）では，考察の中において牛の「価値」という特徴を抽出する際，牛の表現には「馬より劣る」「馬との差なし」という牛と馬との対比関係を指摘している点が興味深い。しかし，対応する諺を挙げただけで，詳しい考察がなされているわけではない。

これに続く馬場（2015）では，「馬」に関する日本の諺を取り上げ，諺に反映された馬に対する人々の捉え方を考察している。具体的には，馬に関して，①全体的特徴，②体の各部分，③動作・行動，④乗馬・飼育という特徴に分類し，それぞれの諺を挙げている。その中で，「馬」の諺から「価値が高い・優れている」「無知」「癖がある」「臆病」などの内容を抽出し，全体の中で，馬がどのように捉えられているかを考察している。さらに，馬場（2015）においても，馬と牛が対比されていることを馬に関する諺の特徴の一つとして挙げている。しかし，馬場（2010）と同様詳しい考察は行われていない。

さて，朱（2009），馬場（2010），馬場（2015）は，諺の中の動物に焦点を当て考察を行っているが，いずれの研究も動物を個別に扱うに留まるのみで，家畜動物間の関係性を探求するには至っていない。

とはいえ，馬場（2010）と馬場（2015）は，日本の諺における「牛」と「馬」の特徴を抽出し，牛や馬に関する捉え方を考察する手法を取っている。この特徴を抽出して対象となる動物を把握する手法は，「牛」と「馬」のメタファー表現の特徴を観察する上でも有意義な手法であると考えられる。そのため，本稿でも馬場（2010）馬場（2015）の手法を参考に，3節において「牛」と「馬」の諺における特徴的な表現群の抽出を試みる。その一方で課題として，馬場（2010）と馬場（2015）では，先に指摘した通り，「牛」と「馬」の表現間の関係性を考察するには至っていない。この部分について，本稿では家畜動物というカテゴリーの中における「牛」と「馬」の関係性の解明を4節で試みる。

2.2　動物のメタファー表現に関する先行研究

この節では，動物のメタファー表現に関する先行研究を紹介し，検討を行う。日本語における動物のメタファー表現の研究に関しては，日本だけでなく，中国においても研究がなされている。そのため，ここでは日本と中国における先行研究の整理を通じて，日本語における動物

のメタファー表現に関する研究の現状とその問題点を把握する。

最初に，日本における動物のメタファー表現に関する先行研究を概観する。

川口（1998）では「動物名が動物の性格を，そしてその性格を持つ人に当てはめられものである。…（中略）動物の行動から振舞の特性が抽出されて，「のろい〔カタツムリ〕」，「〔走るのが〕はやい（ウサギ）」などの表象が生まれ，性質の具現として動物名が用いられる。動物の領域から分離しているためにメタファの用法と分類されている。」と述べている（川口 1998, p.126）。即ち，川口（1998）は動物の名前が，ある動物に類似する性格や行動特性を持つ人をたとえるために使われると主張している。川口（1998）の研究からは，メタファーは動物の性格や行動などの特性に基づいて形成されていることが読み取れる。

次に，松井（2002）は，日本語と英語における犬に関するメタファー表現の意味の共通点と相違点を明らかにしている。その上で，西洋文化と日本文化における人間と犬の関わり方という観点から，共通点と相違点が生じる理由を検討している。考察の中で，松井（2002）は具体的な用例の分析を通して，日本語の犬のメタファー表現の意味は，「役に立たず，劣っていて，それでいて自分の利益のために権力者にはすりよる臆病者」（松井 2002, p.24）というような意味合いに偏っていることを述べている。松井（2002）の問題点としては，「日本語の「イヌ」からはひたすらネガティヴなイメージしか見えてこない」（松井 2002, p.24）と主張しているものの，研究対象を集計しておらず，一部の用例だけで結論を導いている可能性があり，説得力という点において疑問が残る。

山田（2006）では日本語と英語の犬のメタファーについて，文脈により，悪い意味にも良い意味にも用いられると述べている。このようなことが起こる理由としては，犬の持つ特性の様々な点に焦点が当てられるためであると述べている（山田 2006, p.285-286）。このことを踏まえ，山田（2006）では動物の特性はメタファー表現の意味の形成に関わっていることが提唱されている。この山田（2006）の主張からは動物特性への把握がメタファー表現の意味を理解する上で重要であることが読み取れる。

このように，日本国内における動物のメタファー表現に関する研究からは示唆的な記述が見られるものの，松井（2002）や山田（2006）のように考察対象が一つの動物に限定されていたり，川口（1998）のように「動物」という括りで考察を行っていても，個別の対象間の関係性については考察されていないのが現状である。

次に，中国における動物のメタファー表現に関する先行研究を概観する。

王（2008）は動物のメタファー表現の認知メカニズムについて分析を行っている。その中で，動物のメタファー表現は人と動物の間のある類似性を利用しており，自身の感情について動物を用いて表すことを指摘している（王 2008, p.2）。王（2008）の論文では，動物のメタファー表現の特徴に重点を置いて分析されており，動物のメタファー表現には，動物の一部の具体的な特徴がより多く用いられているとし，似た特徴を持つ人や物事をたとえることがあると指摘している。具体的には，鹿は「臆病でおとなしい」，子羊は「かわいい」，猿は「いたずらっ子」などを例として挙げている。王（2008）は動物のメタファー表現には偏りが存在することを提唱している点が示唆的である。しかし，この偏りが生じる原因や各動物間のメタファー表現の間の関係性などについては言及がない。

次に，张（2012）は動物を人間との関係によって，家畜動物と野生動物に分け，この 2 種類の動物のメタファー表現をめぐって分析を行っている。张（2012）では，家畜動物のメタファー表現の中には，動物自身の一部の特徴や人間との関係を用いてメタファー表現を構成することが多いことを指摘している。それに対し，野生動物のメタファー表現においては，一部の外在的特徴を用いてメタファー表現を構成することが多い点で違いがあると述べている。また，张（2012）では，動物の種類は多種多様であり，その個性も異なっており，一つの動物を例としても膨大な特徴があるため，それぞれの特

徴が必ずしもメタファーの対象になるわけではないと主張している（张 2012, p.46）。つまり，人間はメタファー表現を形成するにあたり，動物の一部の特徴に焦点を当てて捉えていることが窺える。その際，選ばれた部分については，メタファー表現が多く見られるのに対して，それ以外の特徴はメタファー表現としては現れないことになる。张（2012）では，王（2008）と同じく，動物のメタファー表現が一部の特徴に偏っていることを認めている点で共通している。だが，なぜその特徴が選ばれやすいのか，また，なぜその特徴が選ばれたのかについては同じく言及が見られない。

また，高（2012）においても，動物というカテゴリーの中で，すべての特徴が等価ではないと主張されている。具体的には，「鼠」というと，まず「臆病」や「万引き」などの特徴を思い浮かべ，「豚」というと，「怠惰」や「汚い」という特徴を思い浮かべることが多いが，実際には「鼠」には「すばしっこい」などの特徴が，「豚」には「無邪気」と「かわいい」という特徴もあることを述べている（高 2012, p.16）。このことから，動物のメタファー表現においては，本質的に動物の特徴の一部に焦点を当て，それを人間に写像しているとし，その際，動物の他の部分の特徴と属性は無視されると提唱している。

さらに，肖（2008）は，動物のメタファー表現の主要な特徴を研究し，動物のメタファー表現の認知ベースと意味変化の関係をめぐって検討を行っている。肖（2008）では，動物のさまざまな特性が，長期にわたって人間の認知に定着し，その後，徐々に固定的動物認知モデルが形成されたと述べている（肖 2008, p.86）。また，肖（2008）は動物のメタファー表現においては，顕著な特徴を持つ動物は，より多くのメタファー表現の根源領域の対象として扱われると指摘している。つまり，人間はメタファー表現を形成する際，動物の最も顕著だと思われる特徴を重点的に用いていることが窺える。

最後に，刘（2022）は「人は動物である」という概念メタファー理論を基礎として，写像の視点から動物に関するイディオムの特徴を分析している。刘（2022）では，根源領域から目標領域への写像が行われる際に，根源領域の特徴の一部だけを選択して写像されることを指摘している（刘 2022, p.155）。具体的には，「人は動物である」という概念メタファーにおいて，動物の特徴の一部が人間という目標領域に写像されることになる。これはすなわち，動物のメタファー表現において，根源領域と目標領域との間の写像には当該の動物のどの特徴に注目するのかという点において偏りがあるということになる。

さて，高（2012）肖（2008）刘（2022）はマクロな観点から動物のメタファー表現について考察しており，動物のメタファー表現全体における特徴を指摘している点が評価できる。しかし，各動物のメタファー表現間の関連性については言及されていない。また，これらの研究においても，王（2008）や张（2012）と同じく，動物のメタファー表現に偏りがあることを認める点で一致しているが，この偏りが生じる原因については言及されていない。

2.3 「馬」のメタファー表現に関する先行研究

この節では，「馬」のメタファー表現に関する先行研究を紹介し，検討を行う。なお，管見の限り，日本においては日本語の諺における「馬」のメタファー表現に関して研究が行われていないのが現状である。そのため，ここでは中国における先行研究を取り上げる。

刘（2015）は，中日の慣用句における動物のメタファー表現を考察している。刘（2015）によれば，それらの表現には特徴があるとし，それは動物が持っている一部の特徴を用いて人の生理的特徴，行為，及び物事の性質をたとえることであるという点を明らかにしている（刘 2015）。刘（2015）では主に「犬」，「猫」，「虫」，「馬」の 4 種類の動物のメタファー表現について研究を行っている。本稿と関わる「馬」に関して言えば，日本語の慣用句における馬のメタファー表現は主に馬の三つの特徴，すなわち体型，行動，性格に集中していると主張している。具体的には，馬の体型については主に馬の聴覚，嗅覚に集中している，馬の行動について

は主に馬のスピードが速いことに集中している，そして，馬の性格については主に馬の俊敏さに集中していることを指摘している。刘（2015）は馬のメタファー表現には偏りがあることを認めているが，これまでの研究と同様，偏りが生じた原因については言及していない。また，刘（2015）では慣用句においてよく馬と牛がセットで現れる表現が多いことを指摘してはいるものの，それについては深く研究を行っていない。

次に，赵（2021）は中日の慣用句から「馬」のメタファー表現の例を挙げながら，根源領域と目標領域の写像関係を説明している。例えば，日本語の慣用句において，根源領域から言えば，馬の外見は美しく，体格ががっしりしていることから，「君子」や「美人」にたとえられるとしている。また，馬は癖があることから，それに似た性格の人を形容すると述べている。さらに，馬の価値が高いという認識に基づいて，馬と牛を対比して，馬をより価値の高いものにたとえることなどの例も挙げている（赵 2021, p.116）。赵（2021）は日本語の慣用句における馬のメタファー表現の特徴について，根源領域では主に「俊敏」，「脚が速い」，「価値が高い」，「無知」などに集中していることを指摘したが，なぜこれらに集中しているのかについては考察はなされていない。また，赵（2021）では，根源領域から目標領域への写像関係においては「馬」の外見，行為，習性及び価値判定などの特徴から人の外見，行為，性格，品質などの特徴への写像であることが提唱されている。

一方，赵（2021）は「馬」を根源領域の中で唯一の対象を想定しているが，馬と牛を対比する形で形成されたメタファー表現について合理的な説明を与えているとは言い難い。

最後に，黄（2022）は中日の動物に関する諺はすべて動物の外形，性格，行為などを用いて，人間の行為，態度，感情，経験などをたとえていると指摘している（黄 2022）。例えば，日本語の馬に関する諺は主に「能力がある」，「スピードが速い」，「価値が高い」，「盲従する」，「外界の刺激に反応しない」，「癖がある」などの特徴に集中していると述べている。黄(2022)の研究でも馬に関する諺に偏りがあることは指摘されているが，その偏りの原因について研究はなされていない。

2.4 「牛」のメタファー表現に関する先行研究

この節では，「牛」のメタファー表現に関する先行研究を紹介し，検討を行う。なお，「馬」の場合と同様，管見の限り，日本においては，日本語の「牛」の諺におけるメタファー表現の研究が行われていないのが現状である。そのため，ここでも主に中国における先行研究を取り上げて紹介する。

まず，周（2020）は，「犬」と「牛」を中心として，例を挙げながら，中日両国の言語文化における動物に関する諺のメタファー表現を分析している。具体的には，中日の諺における牛のメタファー表現の特徴について，周（2020）は「牛」というと，日本人は，反応が鈍く，行動が緩く，愚かで無知な象徴であることを連想する。したがって，日本語では牛に関する諺のメタファー表現はマイナスの意味を持つことが多いと指摘している。一方，中国における牛に関する諺については，大きい，強い，勇敢で勤勉だというプラスのメタファー的意味が多くあることを指摘している（周 2020）。このように，周（2020）はプラスとマイナスの観点から中日の諺における牛のメタファー表現の特徴をまとめているが，どのようにしてこの結論に至ったのかという記述がないため，説得力に乏しい。また，なぜプラスとマイナスの観点で記述することが有効であるのかについての説明がないため，説得力という点においても疑問が残る。さらに，周（2020）は，類似点と相違点を比較しながら分析を行っているものの，「犬」と「牛」を巡ってそれぞれ分析を行っただけであって，動物間の関係性については考察を行っていない。

次に，韩（2022）は中日両国の牛に関する諺を研究対象とし，中日対照の視点から分析を行っている。韩（2022）は収集した諺に対して統計的処理と分析を行い，中日両国の牛に関する諺は主に，牛の「体型」，「速さ」，「習性」，「価

値」などの特徴に偏っている点で共通しているが，それぞれの特徴の面で牛に対する捉え方には違いがあることを明らかにしている（韩 2022)。また，韩（2022）では，諺の中で「馬」と「牛」がよく一緒に現れ，その原因も深く考察する価値があることが指摘されている。韩（2022）は馬と牛の関係に関心を向けている点は注目されるものの，この観点については，今後の研究課題として取り上げているだけで，具体的な記述はなされていない。

最後に，李（2017）は牛が全体概念[(3)]として諺に登場する表現を研究対象として中日対照研究を行っている。具体的には，中日の諺の数量的統計処理を通じて，日本語の諺の中で，牛についての表現は主に「速さ」,「性格」,「価値」,「体型」などのところに集中しているのに対して，中国語の諺においては，牛についての表現は主に「体型と力」,「速さ」,「性格」,「価値」などのところに集中していることを論述している（李 2017)。李（2017）の研究からも中日の諺にはいずれも偏りがあることがわかる。しかしながら，李（2017）は中日の諺において偏っているところの異同を比較するに留まっており，その偏りが生じた原因については具体的な考察が行われていない。

2.5　先行研究のまとめと課題の導出

以上の先行研究からわかるように，これまで動物及び,「馬」と「牛」のメタファー表現については様々な観点から研究が行われてきている。また，動物のメタファー表現に偏りがあるということは，先行研究の指摘の一致する点であることが窺える。

しかしながら，先行研究においては，メタファー表現において偏りが生じることを暗黙の了解として捉えているきらいがあり,「なぜメタファー表現が偏るのか」という問題についての言及はなされていない。また，動物のメタファーに関して，マクロの視点から見た研究であれ，個々の動物についての研究であれ，その指摘は散見されるものの，各動物間の相互関係を考慮せずに行っているものが多いのが現状である。

そこで，本稿では，この問題について，家畜動物というより大きなカテゴリーを設定した上で，家畜動物のメタファー表現の間には体系性があるとの作業仮説を設定し，考察を行う。また，この体系が関与することによって，各動物のメタファー表現には偏りが生じるという仮説を立てる。この作業仮説を実証するために，今回は「家畜」というカテゴリーにおける「馬」,「牛」のメタファー表現を例に，2種類の家畜動物のメタファー表現の関係性，またはこれらのメタファー表現に偏りが生じる原因について考察を行う。

3.「馬」,「牛」のメタファー表現の特徴

本節では具体的な考察に入る前に「馬」,「牛」のメタファー表現について分析を行う。

ここで，メタファー表現と諺，慣用句の関係について説明しておく。まず，メタファー表現自体は諺，慣用句に限らず，文学作品や広告に至るまで幅広いジャンル・媒体に出現するものである。その中で，本稿は，諺，慣用句の中に現れるメタファー表現を対象として分析を行うものである。よって，諺，慣用句は考察範囲を指し，メタファー表現は具体的な分析対象を指す。

これ以降では,「馬」と「牛」の諺，慣用句におけるメタファー表現から特徴的な表現群の抽出を試みる。ここでいう特徴的な表現群とは,「馬」と「牛」のメタファー表現において，ある特徴的な意味が抽出できる表現の集まりのことを指す。なお，本稿の指針として，3例以上であれば，それらを特徴的な表現群であると見なした。

本稿で取り上げる「馬」,「牛」に関する諺，慣用句は,『故事ことわざの辞典』（尚学図書（編）1986）と『国語慣用句大辞典』（白石大二（編）1977）に基づいている。また，諺と慣用句に関する解釈は『故事ことわざの辞典』と『国語慣用句大辞典』に基づいている。以下選定の理由を述べる。

『故事ことわざの辞典』は，故事・諺など約一万五千項目が収録されている。また，各項目

の典拠が正確に明記してあり，どの国から由来したものかはっきり見分けることができる。さらに，項目別に分類され，それぞれに類似の項目，或いは関連の深い項目が集められている。次に，『国語慣用句大辞典』には会話や文章などに役立つ慣用句約一万一千項目が収録されている。また，各項目の意味，用法，用例などが詳細に記載されている。また，慣用句辞典であると共に，慣用句の構造，特性，研究史などの内容を含む「解説」という項目も充実している。以上を加味して，本稿では『故事ことわざの辞典』と『国語慣用句大辞典』を対象として選定した。また，対象とする諺，慣用句の中にはその当該の動物が現れるものだけではなく，その解釈の中に，当該の動物が現れているというものも含まれている。

なお，集計にあたって，表現上類似している場合はそれらをまとめて1例としてカウントした。例えば，「牛の歩み」，「牛歩」のように明らかに「牛の歩み」が「牛歩」に縮まったと考えられる例については，1例としてカウントして集計している。また，「馬」「牛」に関する諺，慣用句には，「塞翁が馬」「牛頭を懸けて馬肉を売る」など中国の故事に基づく成語も広く知られている。なお，本稿では，日本の諺，慣用句[4]を対象とするため，中国の故事成語などに基づく諺，慣用句は取り上げない。

3.1 「馬」のメタファー表現の特徴

本稿が選定した2冊の書籍において集計した結果，日本語の諺，慣用句の中で，「馬」に関するメタファー表現は115句確認された。その特徴を大きく分けると，(1)「優れたもの」，(2)「荒さ」，(3)「脚の速さ」，(4)「消耗品」，(5)「見極め」，(6)「地位の高さ」，(7)「体高」という7つの特徴が抽出される。以下，その詳細を述べる。

(1)「優れたもの」

馬をもって，優れたものや才能のあるものを表すメタファー表現が14句が確認された。

①牛売って馬を買う
②牛を馬に乗り換える
③馬を牛に換える / 乗り換える

④驥尾に付くべし，駑に付くことなかれ
⑤良馬は鞭声 / 鞭影を見て行く

⑥騏驥にも躓きあり
⑦駿馬を塩車に苦しめ大材を小事に用いる
⑧駿馬の躓き武士の手後
⑨驥をして鼠を捕らしむ
⑩千両の馬にも傷
⑪千里の馬も蹴躓く
⑫百貫の馬にもたり
⑬名馬に癖 / 難あり
⑭竜の駒にも蹴躓き；竜馬の躓き

まず，①〜③は馬と牛が表現上対比されている例である。ここでは，牛との対比で，馬は優れていることが表されている。次に，④と⑤は「馬が優れている」ということを直接表現しているものであるが，①〜③とは異なり，「牛」が対比対象になっているわけではない。

一方で，量として多いのは，⑥〜⑭である。⑥〜⑭は「馬が優れている」ということを前提にして，よくない物事を述べる場合に使われている表現である。例えば，⑥はよく走る優れた馬でも時には躓くこともあるという意味から，どんなに優れた人でもたまには思いがけぬ失敗をすることがあるということのたとえである。また，⑦は優秀な人物に誰でもできる簡単な仕事ばかり任せたり，また能力が発揮できない部署に配置したりするということを馬をもってたとえている。さらに表現に着目すると，騏驥，駿馬，千両の馬，千里の馬，百貫の馬，名馬，竜馬などは，優秀な馬をもって，優れた人材や能力がある人のことをたとえている。このことから，馬のメタファー表現においては，「優れたもの」に関連する表現が多いことが窺える。特に，注目すべきは①〜③であり，馬をもって優秀さを表す背景には，牛をもって劣等を表すことが前提になっていることが示唆される。

(2)「荒さ」

次に，馬の荒さをもって人の性格や行為などをたとえる表現が9句確認された。

①人衝く牛は角を切り，人食う馬は耳を切る

②荒馬の轡は前から
③一匹の馬が狂えば千匹の馬が狂う；一匹狂えば千匹狂う[5]
④馬は腹張れば暴れ，人間は腹減れば騒ぐ
⑤噛む馬にも合い口；かぶり馬にも合い口；人食らい馬にも合い口；人食い馬にも合い口
⑥癖ある馬に乗りあり
⑦蹴る馬も乗り手次第
⑧食い付く馬は死ぬまで；噛む馬はしまいまで噛む
⑨三歳で跳ねる馬死ぬまで跳ねる；跳ねる馬は死んでも跳ねる；地獄の馬は死ぬまで跳ねる

①は馬と牛が対比されている例である。この表現では暴れて人を噛む馬と人に突きかかる牛をもって危険であることをたとえている。②では暴れ馬の轡をとらえて押さえることを，難事を処理することにたとえている。また，③では一匹の馬が暴れるとつられて他の馬も暴れだすことから，一人の行動が，他の多くの人を同じような行動に駆り立てやすいことをたとえるものである。④では馬と人間を対照させることで，人の不安，頼りない一面をたとえている。⑤における噛む馬，人食い馬とは暴れ馬のことであり，これをもって「手のつけられない者」をたとえている。⑥と⑦における癖のある馬，蹴る馬も同じく暴れ馬のことであり，癖のある人間のことをたとえている点では⑤と同様である。最後に⑧と⑨では，食い付く馬，跳ねる馬などを用いて悪い癖がある人をたとえている。これらの表現から，馬のメタファー表現において「荒さ」という特徴が抽出できる。

(3)「脚の速さ」

馬の脚が速いことで，人の動きや物事の発展の速さが速いことを表すメタファー表現が6句確認された。

①早い馬も千里のろい牛も千里；牛も千里，馬も千里
②馬に乗るまでは牛に乗れ

③駆け馬に鞭；駆ける馬にも鞭；走り馬にも鞭
④拍車を掛ける[6]
⑤三度目には馬の鞍も置き合わされぬ
⑥乗り掛かった馬

①と②は馬と牛が対比されている例である。①では，馬の脚が速いという特徴をもって「動きが速い，足が速い」という意味を表している。また，②では馬の「速さ」と牛の「遅さ」を対比させることによって，まずは脚の遅い牛に乗ることを学び，その後，脚の速い馬に乗ることへ移行することをもって，出世には段階があることをたとえたものである。③と④は，早く走る馬にさらなる勢いを与える意味から，物事の進行をはやめること，または，さらによくすること，ますます勢いを増すことをたとえている。⑤では災難は思ったより早く来るため，馬の鞍を置いて逃れる暇もないことを指す。この表現の背景には馬が速いことが前提として認められ，災難が降りかかることはより速いということをたとえている。⑥では馬が速いことははっきりと現れてはいないが，この表現の後ろには馬の「速い」という特徴が前提として存在している。つまり，馬が速いだけに，一度乗ってしまうとなかなか降りられないということがたとえられていると言える。このように，①～⑥はすべて馬が速いということを前提にしてできた表現である。これらの特徴を本稿では馬の「脚の速さ」とまとめる。

(4)「消耗品」

馬が消耗品として扱われることに関わる表現が6句確認された。

①馬は飼い殺せ乗り殺せ
②大津馬の追いからし
③殿の馬も借れば三日
④帰り馬の駄賃

⑤駒の朝走り；小馬の朝いさみ
⑥乗馬の乗り落とし

①では，馬を乗りつぶすほど走らせるほうがいいことを指している。ここでは馬は十分に利用されているもののたとえに使用されている。次の②における「大津馬」は，使い続けられなくなるまで使うことのたとえである。また，③での馬は借りたものとして，十分に利用しなければ損だということを指すことによって，馬は十分に使われるものにたとえられている。④ではこの表現の裏に隠された意味が読み取れる。具体的には，帰りの馬は空いていて，何も乗せていないのは損だと思われることから，運賃が安くても，空いているよりはましであることを表している。この表現からも馬が十分に使われているものであることが読み取れる。川又（2005）では，「馬は，交通・運輸・農耕・軍事に利用され，あるいは神をのせ，神の車を牽引し，死者の魂をのせて天にのぼり，死者とともに墳墓に埋葬され，王侯の外交で贈答される。馬肉はランクのたかい食料であった。戦場で生死を共にし，英雄・名将の伝承には名馬がきりはなせない。」（川又 2005, p.148）と述べていることからも，馬は人々にとって有用で，多くの分野で広く使われていることがわかる。⑤と⑥では馬が消耗品として力には限りがあるため，持久力がないことをたとえている。これらの表現を踏まえて，馬のメタファー表現の特徴の一つとして，「消耗品」という特徴を抽出する。

(5)「見極め」
馬を見極めることを通して人や物事の鑑定を表す表現が 5 句確認された。

①馬と女はてんで目きき
②馬と武士は見かけによらぬ
③馬には乗って鞍味をみよ
④馬には乗ってみよ，人には添うてみよ；人と馬には乗ってみよ添ってみよ
⑤馬は馬具によって判ぜられず

①は馬と女の鑑定は人によってさまざまであることを表している。②は武士の値打ちを判断することは馬に対する判断と同様 , 外見だけで判断すると真価を見損なうことになることを指している。③，④，⑤は馬を判断することを用いて，人の品質，能力などを判断することをたとえる表現である。馬には良し悪しがあり，人柄や物事にも優劣がある。この点は人間においても同様である。ゆえに人や物事の鑑定は馬の鑑定にたとえられている。①〜⑤の表現においてはいずれも，良い馬，あるいは，悪い馬が前提となっているわけではない。そうではなく，良い馬，悪い馬がいる中で，いかに見極めを行うかが大事であることに焦点がある。この特徴を踏まえて，「見極め」という特徴を抽出する。

(6)「地位の高さ」
馬のメタファー表現には，地位の高さに関わる表現が 5 句確認された。

①馬に乗るまでは牛に乗れ

②馬と武士は見かけによらぬ
③駿馬の躓き武士の手後れ
④死に馬に鍼；死馬に鍼を刺す
⑤殿の馬も借れば三日

①は馬と牛が対比されている例である。①では，馬をもって高い地位のことをたとえる。②と③では「馬」が武士と同列に論じられている。中川（1988）はウマは武士の特徴となり，特権階級の権威の象徴となるのであると指摘している（中川 1988, p.71）。④では，馬が死んだ後は放置して見捨てるのではなく，一縷の期待をこめて治療してみるということであり，ここから馬の貴重さを表していることが窺える。また，⑤に表れているのは，馬は主君の所有物である。小林（1951）では，「もっとも五世紀前葉に乗馬の風習が確認せられたからといって，（中略）それまでの乗馬の目的は，まず特殊な地位の人人の交通機関であり，あるいは騎猟の遊びのためであったのではあるまいか。」と述べている（小林 1951, p.186）。つまり，馬

は鶏や犬とは異なり，庶民が日常的に持てる動物ではなかったということである。これらの表現は，当時の馬の地位が高かったことを前提としたものであることが窺える。ここまでの表現を踏まえ「地位の高さ」という特徴を抽出する。

(7)「体高」

馬の体高に関する特徴を用いて物事の大きさを表すメタファー表現が 4 句確認された。

①大馬も八斗，小馬も八斗
②蚊を殺すにはその馬を撃たず
③蜘蛛の家に馬を繋ぐ
④瓢箪から駒が出る

①では人の体型や能力の大きさを馬の大きさをもってたとえている。②では「蚊」と「馬」を対比させ，その中で体の大きい馬は大きなことのたとえとして用いられている。③は蜘蛛の巣で馬をつないでもすぐ切れてしまうことから，蜘蛛の巣に馬を繋ぐことはできないという意味を表している。大きな馬と小さな蜘蛛の間には大きさの差がある。このメタファー表現からは馬は体が大きいという特徴が読み取れる。④では瓢箪の「小」と馬の「大」も対照的である。瓢箪くらいの小さなものから，馬のような大きなものが出るような状況がありえないことを指している。このメタファー表現も馬の体が大きいという特徴に基づいて構成されていることがわかる。このように，以上のメタファー表現は「体高」という特徴に集中している。

以上から，日本語の諺，慣用句における馬のメタファー表現の特徴として，(1)「優れたもの」，(2)「荒さ」，(3)「脚の速さ」，(4)「消耗品」，(5)「見極め」，(6)「地位の高さ」，(7)「体高」という 7 つの特徴的な表現群が抽出された。なお，他の例については , 1 例あるいは 2 例に留まっており，特徴群を抽出するに至らないものであったことをここに述べておく。

3.2 「牛」のメタファー表現の特徴

本稿が選定した 2 冊の書籍において集計した結果，日本語の諺，慣用句の中で，「牛」に関わるメタファー表現は 71 句確認された。その特徴を大きく分けると，(1)「脚の遅さ」，(2)「劣ったもの」，(3)「売買の対象」，(4)「地位の低さ」という 4 つの特徴が抽出された。以下，その詳細を述べる。

(1)「脚の遅さ」

牛の脚が遅いことで人の動作や物事の発展のスピードが遅いことを表すメタファー表現が 12 句確認された。

①牛の歩みも千里；牛も千里，馬も千里
②馬に乗るまでは牛に乗れ
③牛を馬に乗り換える
④馬を牛に換える / 乗り換える
⑤牛売って馬を買う

⑥男と牛の子は急ぐものでない
⑦牛盗人と言わりょとも後生願いと言われな
⑧牛の籠抜け
⑨牛の歩み；牛歩
⑩暗がりから牛
⑪猿知恵牛根性

⑫牛の一散；牛の一散と女子の知恵とは用に立たぬ；女の利発牛の一散

①～⑤は牛と馬を対比させた表現である。牛は馬との対比で，牛は動きが遅いことが表されている。例えば，①では，牛は馬よりスピードが遅いが，この遅い牛の足どりでもたゆまず行けば千里の遠くまでも行けることを指している。②は速い馬に乗る前にのろい牛に乗って慣れる必要があることをいう。③，④，⑤は歩みののろい牛から，早い馬に乗り換えることを指している。⑥～⑪は馬と対比されているわけではないものの，牛が遅いということを表している表現である。具体的に言えば，⑥での「牛の子は急ぐものでない」とは，牛が遅いものであることを表している。⑦において注目されるのは，牛は無口で遅いということであり，そしてそのことを前提として，同じ特徴を持つ人を

「牛盗人」と呼ぶ点である。⑧では牛の遅くて鈍重な動きから鈍重で手際の悪いさまのことをたとえている。⑨においては，牛は脚が遅いことをもって，進みのおそいことをたとえている。⑩は暗い場所ではっきり見えないから遅くなることに加え，牛自身の歩みが遅いことから，両者が重なって，さらに遅くなることをたとえている。⑪では，牛と猿を対比させて，牛の「鈍重」という特徴を抽出している。⑫も牛が遅いということが前提になっている表現である。「牛の一散」という表現は，牛が一散に走り出すことを瞬間的なものとみなす。つまり，人間は牛というのは，「遅い」のが普通だという考え方をしているため，瞬間的にスピードを出すことを偶発的なものと考えている。そのため，実際にはこの表現は牛の動きが遅いことを前提にしているものであると考えられる。このように，牛のメタファー表現において，「脚が遅い」という表現が特徴的な表現群として抽出される。

(2)「劣ったもの」

牛のメタファー表現において，牛を劣ったものとして例える表現が 8 句確認された。

①牛売って馬を買う
②牛を馬に乗り換える
③馬を牛に換える / 乗り換える
④馬を買わんと / 問わんと欲してまず牛を問う

⑤蒔絵の重箱に牛の糞盛る
⑥良い時は牛の糞が味噌となる

⑦隠悪の僧死して牛に生を変ゆる
⑧破戒の出家は牛に生まれる

①〜④は牛と馬を対比している例である。馬との対比で，牛は劣ったものとして表現されている。次に，⑤と⑥は，馬と対比されているわけではないが，牛が劣ったものということを表したものである。具体的には，「牛の糞」を用いて粗悪な物をたとえている。⑦と⑧は牛が劣ったものということが前提となっている表現である。具体的には，牛は悪事を働いたり，戒律を守らなかったりする僧の生まれ変わりとみなされる。つまり，ここで牛は劣等なものの象徴となっていると言える。以上の表現から，牛のメタファー表現において，牛の劣等に関わる表現が特徴群として抽出される。

(3)「売買の対象」

牛のメタファー表現には牛を売買の対象とする表現が 6 句確認される。

①馬を買わんと / 問わんと欲してまず牛を問う
②牛売って馬を買う

③朝酒は牛売ってでも飲め
④牛売って牛にならず
⑤女賢しくて牛売り損なう；おなご賢しくて牛売り損なう
⑥童賢しくして牛売り損なう；童小賢し子牛売られぬ

①と②は馬と牛が対比されている例である。①では，馬を買うつもりで，その店の掛け値を知るために，その前に牛の値段を聞いてみることを意味している。ここでは，牛は馬より値段の低いものとして扱われている。②で「牛を売る」で劣ったものを優れたものに取り替えることをたとえている。この表現において，牛は捨てられるものではなく売られるものである。このことからみれば，牛は商品として価値があることを示しているが，馬に比べて価値が低いものであることがわかる。③での「牛を売る」とは，文字通りの意味だけではなく，どうしてもお金を工面しなければならないという意味がある。このメタファー表現が成立する前提として，牛は商品としての価値があることである。④においては，牛は買われるものであり，売られるものでもある。「牛を買う」と「牛を売る」との間の価格差を用いて，買い換えると損をすることのたとえである。⑤と⑥において女性と子供が牛を売った時に利益を損じたことで浅知

恵，浅慮をたとえている。以上の表現では，牛を売買の対象としてメタファー表現を構成している。これらの表現の特徴を「売買の対象」と特徴づける。

(4)「地位の低さ」

最後に，牛のメタファー表現において，牛を用いて「地位の低さ」を表す表現が4句確認された。

①馬に乗るまでは牛に乗れ

②一匹牛に前田荒らさぬ
③寝た牛に芥かくる；死に牛に芥かける
④奉公人と牡牛は使いようで動く

①は馬と牛が対比されている例である。①では，牛をもって低い地位のことをたとえる。②は耕作に使う牛が一匹死んでも，田が荒れてしまうことはないということを指している。このことからみると，牛は価値が低いことがわかる。それが転じて，牛は重要ではない人をたとえるのに使われている。③では，寝た牛や死んだ牛がむやみにごみなどをかけられることには，牛の価値が低いことが前提になっている。ここから，罪のない一般人のたとえとして使用されている。④では牛を奉公人と対照するのは，実際には牛の価値が低いというベースに基づいた表現である。これらの表現は，いずれも牛の価値の低さを前提として人の地位が低いというところに関する表現である。よって「地位の低さ」と特徴づける。

以上から，日本語の諺，慣用句において，牛のメタファー表現の特徴は「脚の遅さ」,「劣ったもの」,「売買の対象」,「地位の低さ」という表現群が抽出された。なお，馬の場合と同様，他の例については，1例あるいは2例に留まっており，特徴群を抽出するに至らないものであったことをここに述べておく。

4.「馬」と「牛」のメタファー表現の関係性

本節では，前節の「馬」と「牛」のメタファー表現の分析を通じて，日本語の諺，慣用句において，この2種類の動物のメタファー表現は家畜というカテゴリーにおいて一定の関係性があることを論証する。

4.1 「優れたもの／劣ったもの」

3節において，馬の特徴的な表現群として「優れたもの」が，牛の特徴的な表現群として「劣ったもの」が抽出された。実はこの表現群が成立する背景には，馬と牛の対立関係が前提として機能している。

①牛売って馬を買う
②牛を馬に乗り換える
③馬を牛に換える／乗り換える

④騏驥にも躓きあり
⑤良馬は鞭声
⑥驥をして鼠を捕らしむ
⑦名馬に癖／難あり

⑧蒔絵の重箱に牛の糞盛る
⑨良い時は牛の糞が味噌となる
⑩隠悪の僧死して牛に生を変ゆる
⑪破戒の出家は牛に生まれる

まず，①〜③は「馬」と「牛」が共に一つのメタファー表現の中に登場するものである。この三つの表現において，「馬」は「優れたもの」のたとえ，「牛」は「劣ったもの」のたとえとなっている。つまり，「馬」と「牛」はこれらの表現において「優れたもの／劣ったもの」という対立関係にあると言える。

次に，④〜⑦は「馬」のみが一つのメタファー表現の中に登場している例である。3.1節で見たように，「馬」のメタファー表現において，馬を用いて「優れたもの」をたとえた表現が多く観察され，特徴的な表現群として抽出された。特に，「騏驥」,「良馬」,「名馬」などの表現について，これらの表現には「馬が優れている」という意味が含まれており，馬が優秀なものの象徴であることを明示している。

一方で，⑧〜⑪は「牛」のみが一つのメタフ

ァー表現の中に登場している例である。まず，⑧と⑨における「牛の糞」は「粗悪な物」のたとえとして用いられている。また，⑩と⑪において，「牛」は「悪業者」を象徴している。このような「粗悪な物」「悪業者」という象徴は，「牛」が「劣ったもの」をたとえていることを示している。

さて，①〜③とは異なり，④〜⑪の表現には，対比対象として「馬」あるいは「牛」が表現として出現しているわけではない。しかし，④〜⑪のような「優れたもの / 劣ったもの」という特徴的な表現群として抽出される背景には，馬と牛が対立関係として捉えられていることが前提になっていることが示唆される。

4.2 「脚の速さ / 遅さ」

次に，「脚の速さ / 遅さ」に関しても，馬と牛の対立関係を成していることを示す。これに関しても，3 節において馬の特徴的な表現群として「脚の速さ」が，牛の特徴的な表現群として「脚の遅さ」が抽出されたことと関わる。

①牛も千里，馬も千里；早い馬も千里のろい牛も千里
②馬に乗るまでは牛に乗れ

③駆け馬に鞭；駆ける馬にも鞭；走り馬にも鞭
④拍車を掛ける
⑤三度目には馬の鞍も置き合わされぬ

⑥牛の籠抜け
⑦暗がりから牛
⑧牛の歩み；牛歩
⑨牛の歩みも千里
⑩牛盗人と言わりょとも後生願いと言われな
⑪牛の一散；牛の一散と女子の知恵とは用に立たぬ；女の利発牛の一散

まず，①と②は「速さ」に関わる意味を表す際に，「馬」と「牛」の両方が一つのメタファー表現の中に現れているものである。①と②においては，「馬」をもって動きが素早いという意味を表しているのに対し，「牛」をもって，動きが遅いという意味を表している。つまり，「馬」と「牛」は「脚の速さ / 遅さ」という意味を表す上で対立関係にあることが分かる。

次に，③〜⑤は「馬」をもって「脚が速い」ことを意味する表現である。まず，③における「駆け馬」「走り馬」という表現には，速く走るという意味が含まれている。また，③と④は馬の脚が速いことを前提に，さらに速度を上げることを意味している。さらに，⑤においては，馬の脚が速いということを直接表しているわけではないが，3.1 節で分析したように，その背後には馬の「速い」という特徴が前提として存在している。以上，これらの「馬」が関わるメタファー表現においては，すべて「脚が速い」という意味が表れている。

一方，⑥〜⑪は「牛」をもって「脚が遅い」ことを意味するものである。具体的には，「馬」の例である③と④に反し，⑥と⑦は牛の脚が遅いことを前提として，そこからさらに遅くなることを意味している。また，⑧〜⑪の表現においては，3.2 節で論述したように，「牛」はそれぞれ「動作ののろい人」，「鈍重なもの」などを意味している。これらは全て「脚が遅い」ことに関わるものである。

このように，馬をもって「脚が速い」ことを表し，牛をもって「脚が遅い」ことを表す表現が成立する背景には，4.1 節と同様，「脚の速さ / 遅さ」という点において，「馬」と「牛」が対立関係を成していることが示唆される。

4.3 「地位の高さ / 低さ」

さらに，「地位の高さ / 低さ」を表す際にも，馬と牛が対立関係を成していることを見る。これまでと同様，3 節において馬の特徴的な表現群として「地位の高さ」が，牛の特徴的な表現群として「地位の低さ」が抽出されたことと関わる。

①馬に乗るまでは牛に乗れ

②馬と武士は見かけによらぬ
③駿馬の躓き武士の手後れ
④死に馬に鍼；死馬に鍼を刺す

⑤奉公人と牡牛は使いようで動く
⑥死に牛に芥かける；寝た牛に芥かくる
⑦一匹牛に前田荒らさぬ

まず，①は「馬」と「牛」が共に一つのメタファー表現の中に出現している例であり，「地位」の意味を表すものである。ここでは，「馬に乗る」ことで「高い地位に就く」ことをたとえ，また，「牛に乗る」ことで「低い地位に就く」ことをたとえている。

次に，②〜④は「馬」のみが一つのメタファー表現の中に出現している例である。具体的には，②と③では，「馬」が武士と同列に論じられている。また，④においては，死んだ馬に鍼で治療を施すことから，馬が貴重な存在であることが読み取れる。これらの表現においては，「馬」をもって地位の高さを表していることが窺える。

一方で，⑤〜⑦は「牛」のみが一つのメタファー表現の中に出現している例である。具体的には，⑤では「牛」は奉公人と同列に論じられている。ここからは，⑤における「牛」でたとえた奉公人と②，③における「馬」でたとえた武士との間の地位の関係から，「馬」と「牛」をもって，地位の対立関係を表していることが見られる。また，⑥における，死んだ牛の待遇は，④における死んだ馬の待遇と鮮やかな対照をなしており，この点においても馬と牛は地位の面で対立していることが考えられる。最後に，⑦においては，牛が一匹死んでもさしたる影響はなく，代わりがいくらでもいるという意味を表していることから，牛の地位の低さを表している。

このように，②〜⑦においては，①と異なり「馬」と「牛」は直接対立対象として出現していないが，②〜⑦のようなメタファー表現が成立する背景には，これまでと同様，馬と牛が対立関係を成していることが示唆される。

4.4 「持久力の有無」

馬と牛の対立関係を考えると，「脚の速さ / 遅さ」という特徴から派生して，持久力の有無に関しても，馬と牛の対立関係が想定されていることが観察される。この点においては「馬」と「牛」が共に一つのメタファー表現の中に出現している例は観察されていなかった。しかし，以下の表現を見ると，「持久力の有無」という点において「馬」と「牛」が対比関係にあることが示唆される。

①駒の朝走り；小馬の朝いさみ
②乗馬の乗り落とし

③牛の歩みも千里
④猿知恵牛根性

まず，①と②は「馬」をもって持久力がないことを意味する表現である。具体的には，①において，馬は最初こそ速度が速いが，元気を出し過ぎてしまう結果，最後まで持続しないことを表している。また，②において，馬は騎乗時間が長くなるにつれて，体力がなくなっていくことをもって，徐々に貧しくなっていくことをたとえたものである。

一方で，③と④は「牛」をもって持久力があることを意味する表現である。具体的には、③における牛は，速度こそ遅いが，①における馬に対して，最後まで継続する力があることを表している。また，④においては，牛をもって，こつこつと最後まで努力することをたとえている。

以上のように，持久力の有無という観点からみると，「牛」と「馬」の間には，「持久力の有無」という点において対立関係が成立している。

4.5 「落ち着きの有無」

最後に，馬と牛の間には，「落ち着きの有無」という特徴をめぐって対立関係にあることを示す。なお，この特徴は，3節において抽出した馬及び牛の複数の特徴的な表現群を跨ぐ。

①馬は腹張れば暴れ，人間は腹減れば騒ぐ
②渇馬水を守り餓犬肉を守る
③裸馬の捨て鞭

④痩せ馬の道急ぎ

⑤商いは牛の涎；商人は牛の涎
⑥牛は死んでも前田は荒らさぬ
⑦遅牛も淀，早牛も淀
⑧男と牛の子は急ぐものでない

まず，①〜④は「馬」をもって，落ち着かないことを意味する表現である。具体的には，①においては，馬は暴れることがあるという不安定な状態を用いて，人間の暴れ騒ぐという軽率な状態をたとえている。佐草（1995）によると，馬は大きな体に似ずとても臆病なところがある動物なので，その臆病さ故にとんでもない狂騒状態に陥ることがある（佐草 1995, p.66）と述べている。つまり，馬の性格の中に不安定の一面があることを表していると言える。次に，②では喉が渇いた馬は目の前に置かれた水に抵抗できないに違いないので，ここでは明らかに喉が渇いた馬を頼りにならない人にたとえている。また，③においては，馬を用いて，何もかもなくした状態になったあと，一層すてばちになってめちゃくちゃなことをする人をたとえている。④では馬が道を急ぐ状態を人の軽率な状態にたとえている。以上の表現においては馬を用いて人間の落ち着きのない状態をたとえている。

それに対して，⑤〜⑧は「牛」をもって，平静さを意味する表現である。具体的には，⑤は商売をするには，せっかちであってはならず，気長に辛抱強く続けることが大切であるということを意味している。次に，⑥において，牛は堅実で仕事に忠実な人のたとえである。また，⑦は多少の遅速はあっても，結果は同じだから，あわてることはなくて，着実にやればいいということを表している。馬場（2010）は日本語の「早牛も淀，遅牛も淀」は「牛」の「着実さ」を肯定的に捉えた諺であると指摘している（馬場 2010, p.22）。⑧では「牛の子」は急がない，つまり，動きが遅いので，安定した状態を維持しやすくて堅実であることを表している。男と牛を同列に論じ，男に「牛」のように堅実であることを勧める表現である。

以上から，馬は軽率で落ち着きがないことを表しており，逆に牛は堅実で落ち着きがあることを表していると言える。故にここにも，前提として馬と牛とが対立関係にあることが示唆される。

以上，3節で抽出した馬と牛の特徴的な表現群を観察し，そこから，ある表現が成立する背後には馬と牛との間に対立関係が前提として想定されていることを示した。

5. 考察

本節では，4節の分析に基づき，「馬」と「牛」のメタファー表現を例に，メタファー表現に偏りが生じる原因について考察を行う。

4節では，①「優れたもの / 劣ったもの」，②「脚の速さ / 遅さ」，③「地位の高さ / 低さ」，④「持久力の有無」，⑤「落ち着きの有無」という5つの特徴において，馬と牛が対立関係を成していることを示した。実は，先に挙げた5つの特徴にはある共通点がある。それは，いずれの特徴もある対象と比較することによって初めて成立する相対的な意味であるということである。

具体的には，「優れたもの / 劣ったもの」という特徴で言えば，馬は牛に比べて優れている，牛は馬に比べて劣っているという相対的な関係を取り結んでいる。より詳しく言えば，「優れている」あるいは「劣っている」という特徴は，馬，あるいは，牛単体では定まるものではなく，比較対象があって初めて定まる意味であるということである。また，「脚の速さ / 遅さ」に関しても，馬は牛に比べて脚が速い，牛は馬に比べて遅いという相対的な関係にある。残る「地位の高さ / 低さ」，「持久力の有無」，「落ち着きの有無」という特徴についても同様の指摘が可能である。つまり，諺，慣用句における，馬と牛のメタファー表現から抽出された特徴的な表現群は，馬と牛の対立関係が前提となって生じた可能性があるということである。

この主張はもちろん，全ての「馬」と「牛」のメタファー表現が対立関係を前提として成立

していると主張するものではない。当然，メタファー表現が作られる過程で，人間と馬の関係のみ，或いは人間と牛の関係のみで成立することは当然考えられる。3節において，特徴的な表現群として抽出できなかったメタファー表現はここに属するものであると考えられる。

例えば，馬のメタファー表現には「馬に銭」,「馬の耳に念仏」,「馬に乗る者は落ち，道行く者は倒る」,「馬を得て鞭を失う」,「人の馬に乗るな」,「馬が合う」というものがあり，牛のメタファー表現には「牛追い牛に追わる」,「牛に経文」,「牛に乗って牛を尋ねる」,「角を矯めて牛を殺す」,「食ってすぐ寝ると牛になる」,「牝牛の角を定規にする」というものがある。これらは4節で見た「馬」と「牛」における対立関係が前提としてあるものではなく，人間と馬の関係或いは人間と牛の関係においてのみ成立したメタファー表現であると考えられる。

しかし，今回の分析からみれば，馬と牛の対立関係が前提となったメタファー表現も確認されるというのが本稿における主張である。事実，メタファー表現の中には，馬と牛の対立関係が明示的に現れているものがある。例えば,「牛を馬に乗り換える」,「早い馬も千里のろい牛も千里」,「牛売って馬を買う」,「馬に乗るまでは牛に乗れ」などの表現がそれに該当する。それに加えて，3節及び4節の分析からは，表現上は馬と牛とを対立させていないものであっても，その背景にはやはり「馬」と「牛」との対立関係が想定されていることが示唆されるメタファー表現も確認されている。つまり，諺，慣用句における馬と牛のメタファー表現においては,「馬」と「牛」との対立関係がある程度メタファー表現を成立させる上での前提として浸透していることが窺えるのである。

最後に，従来のメタファー研究においては，根源領域から目標領域への投射を考える際，根源領域に一つの対象しか想定されていないことが暗黙の了解となっていた。しかし，今回の結果を踏まえると，メタファー表現が形成される際，根源領域において二つ以上の対象，今回であれば「馬」と「牛」が対立関係として想定されている可能性が示唆される。もちろん，全てのメタファー表現がそうであると主張するものではなく，本稿の結果から言えば，あくまで，相対的な意味を表すメタファー表現においては，根源領域において，二つ以上の対象が対立関係を取り結ぶ形で想定されているのではないかという主張である。

6. まとめと今後の課題

本稿では,「家畜」というより大きなカテゴリーを設定した上で，日本語の諺，慣用句における「馬」,「牛」のメタファー表現の特徴を分析し，以下の2点を例証した。

①「馬」と「牛」のメタファー表現においては，馬と牛とが対立関係を前提として成立している表現が見られること。

②「馬」と「牛」が対立関係を成している表現は，考察の範囲においては相対的な意味を表す場合であったこと。

さらに，メタファー表現によって表される意味的特徴に偏りが見られることには，今回のような2つの対象における対立関係が前提となっていることが一つの要因として関わっている可能性があることを示した。

今後の課題として，2点挙げる。一つは,「家畜」というカテゴリーの体系について，今回は「馬」と「牛」のメタファー表現を見たが，家畜にはまだ犬，猫，鶏，豚などがあり，これらのメタファー表現が家畜というカテゴリーの中で，どのように位置づけられていくのか，その記述を広げていくことが考えられる。もう一つは，中国語の諺，慣用句における「馬」と「牛」のメタファー表現についても，今回の結果と同様のことが言えるかどうかを検証することが考えられる。

〔注〕

(1) 本稿での日本語以外の引用，記述などは，特に出所を明記していない場合はすべて筆者の訳である。

(2) 朱（2009）は，朱銀花が2009年に完成させた京都大学の博士論文の『日・中・韓三国の言語における動物文化の比較考察――「馬」、「牛」、「犬」、「猫」にまつわることわざを中心に』のことを指す。また，朱（2011）は同氏の博士論文が中国で出版されたものである。そのため，本稿では朱（2009）と朱（2011）を同一文献とみなし，「朱（2009）」と表記する。

(3) 全体概念とは，例えば牛で言えば，牛の部位には言及せず，牛を総体として扱うことを指す。李（2017）の研究では，研究対象を牛が総体として現れる諺に限定されている。牛の体の部位に関する諺には触れていない。

(4) 本稿では『故事ことわざの辞典』と『国語慣用句大辞典』に漢籍類及び西洋での出典が示されていない諺，慣用句を便宜的に日本の諺，慣用句であると見なしている。

(5)「一匹狂えば千匹狂う」という諺の中には「馬」が含まれていないが，「一匹の馬が狂えば千匹の馬が狂う」という諺の解釈の中に，「『一匹狂えば千匹狂う』とも」と書いてあるため，本稿においては「一匹の馬が狂えば千匹の馬が狂う」が縮まったものと考え，1例としてカウントして集計している。

(6)「拍車を掛ける」という慣用句の中には「馬」が含まれていないが，「拍車」とは馬の腹部を刺激して馬をあやつるものという意味であるため，本稿においてそれを「馬」に関する表現として取り上げている。

参考文献

馬場俊臣（2010）「「牛」に関することわざ――「牛」をどう捉えてきたか」『札幌国語研究』15：A13-A22

馬場俊臣（2015）「「馬」に関することわざ――「馬」をどう捉えてきたか」『札幌国語研究』20：A1-A14

川口順二（1998）「動物名から道具名へ――メトニミ・メタファ・意味の変化」『藝文研究』慶應義塾大学藝文学会 75：112-127

川又正智（2005）「馬の家畜化をめぐる研究動向」『国士舘大学文学部人文学会紀要』37：141-153

小林行雄（1951）「上代日本における乗馬の風習」『史林』34（3）：173-190

松井真人（2002）「メタファーの普遍性と文化的変異についての一考察：英語と日本語におけるイヌに関するメタファー表現をめぐって」『山形県立米沢女子短期大学紀要』山形県立米沢女子短期大学 37：19-30

中川志郎（1988）『日本の風土を伝えることわざ　動物』創拓社

佐草一優（1995）『ウソ・ホント？動物ことわざ事典』ビジネス社

新村出（編）（2018）『広辞苑（第七版）』岩波書店

白石大二（1977）『国語慣用句大辞典』東京堂出版

尚学図書（編）（1986）『故事ことわざの辞典』小学館

山田伸明（2006）「〈犬〉と〈dog〉のメタファー」『貿易風：中部大学国際関係学部論集』中部大学国際関係学部編（1）：276-288

赵亚明（2021）「认知视角的日汉“马”惯用句的隐喻对比」『现代交际』24（1）：115-117

张孝飞（2012）『汉语动物范畴词汇的隐喻研究』安徽大学

韩宇芳（2022）「中日谚语的动物形象差异――以“牛”为例」『今古文创』48（48）：96-98

黄荣（2022）『中日动物谚语比较研究』哈尔滨理工大学

高磊（2012）『汉语生肖熟语的隐喻研究』曲阜师范大学

项承东・王茂（2009）「英汉动物隐喻的跨文化研究」『现代外语』32（3）：239-247

王清（2008）『动物隐喻的认知和应用研究』上海交通大学

李凌飞（2017）「“牛”谚语的中日比较――从如

何把握作为整体的牛的角度出发」『湖北第二师范学院学报』34（12）：38-43
刘舒（2015）『中日惯用语中动物隐喻的对比研究』哈尔滨理工大学
刘宁宁（2022）「从概念隐喻映射的角度看英汉动物隐喻习语」『汉字文化』26（16）：155-157
肖遥遥（2008）「动物隐喻的认知基础及语义演变」『郑州航空工业管理学院学报』27（6）：83-86
朱銀花（2009）『日・中・韓三国の言語における動物文化の比較考察――「馬」、「牛」、「犬」、「猫」にまつわることわざを中心に』京都大学（博士論文）甲第 14729 号
朱银花（2012）『日中韩三国语言中动物文化比较研究――以“马”、“牛”、“犬”、“猫”的谚语为中心』吉林大学出版社
周影（2020）『中日谚语中的隐喻表达――以动物谚语为主』辽宁大学
G・レイコフ（著），M・ジョンソン（著），渡部昇一（ほか訳）（2010）『レトリックと人生』大修館書店
Kövecses,Z.（2002）,*Metaphor:A Practical Introduction*,Oxford University Press, Oxford
Lakoff,George.& Johnson, Mark.（1980）, *Metaphors We Live By*,The University of Chicago Press, Chicago
Wierzbicka,A.（1996）,*Semantics:Primes and Universals*,Oxford University Press,New York

A Study on Metaphoric Expressions Related to Livestock

— Taking "horse" and "cow" in Proverbs and Idiomatic Sentences in Japanese as examples —

HAN Qi
Graduate School of Integrated Science and Art, Human Sciences major, University of East Asia, Yamaguchi, Japan
College of Foreign Languages, Anshun University, Anshun, Guizhou, China
2759036420 @ qq.com

Abstract

Since it was pointed out by Lakoff & Johnson (1980) that metaphors permeate not only linguistic activities but also all aspects of everyday activities, including thought and behavior, metaphor research from a cognitive perspective has been active. In recent years, the study of animal metaphors has attracted much attention. However, most of the animal metaphor studies have been completed in terms of individual animals, few studies consider the larger category of domestic animals. There are still many unclear points concerning the systematics of metaphorical expressions when viewed from the perspective of domestic animals. This paper explored the relationships among individual domestic animals in the larger category of domestic animals. By focusing on metaphorical expressions of "horse" and "cow" in Japanese proverbs and idioms, it examined the relationship exists between these two metaphorical expressions. As a result, the expression groups with some characteristic meaning were extracted from the "horse" and "cow" metaphor expressions, and it became clear that there is a complementary relationship between these groups of expressions. In addition, the results also shows that metaphorical expressions of "horse" and "cow" tend to focus on certain characteristics of an animal, such as "superior or inferior" characteristics. One of the reasons for such tendency, within the scope of this study, is that metaphorical expression is premised on the opposition between "horse" and "cow" .

Keywords: livestock, horse, cow, metaphor, opposition